

2018 年 8 月 26 日（日）「信仰の表裏 ～依存と愛～」

マタイ 19:13-15

13 そのとき、イエスに手を置いて祈っていただくために、子どもたちが連れて来られた。ところが、弟子たちは彼らをしかった。14 しかし、イエスは言われた。「子どもたちを許してやりなさい。邪魔をしないでわたしのところに来させなさい。天の御国はこのような者たちの国なのです。」15 そして、手を彼らの上に置いてから、そこを去って行かれた。

【序論】

もう 5 年ほど前になりますが、2012～2014 年にかけて、週報のコラムに「子どもと一緒にの礼拝」という内容で連載させていただきました。これは、鞭木由行先生という方が書いておられる『子どもと一緒にの礼拝』という本に感銘を受け、当教会でも子どもが幼いうちから礼拝に出席する道筋を付けたいという切なる思いをもって書かせていただいたものです。従来の日本の教会形成においては、子どもは礼拝の蚊帳の外で、日曜学校が礼拝の代わりとされ、礼拝とは大人のものだというイメージが持たれてきました。礼拝中に子どもが泣くと、その子の親は「迷惑をかけている」という思いになりやすく、居づらくなるのはいつの時代でも同じなのかも知れません。しかし、聖書は明らかに子どもが礼拝の場に居合わせることを当然のこととして描いています。旧約聖書の多くの箇所が、礼拝の場に子どもが出席していたことを証ししています。

- ・ あなたがたは、息子、娘、男奴隷、女奴隷とともに、あなたがたの神、主の前で喜び楽しみなさい。（申命 12:7）
- ・ 民を、男も、女も、子どもも、あなたの町囲みの中にいる在留異国人も、集めなさい。
（申命 31:12）

これらの主の言葉から、老若男女を問わず礼拝の場に居合わせていたことが窺えます。また、新約聖書にも数多く、子どもが礼拝に出席していた痕跡があります。

子どもたちよ。主にあつて両親に従いなさい。これは正しいことだからです。（エペソ 6:1）
エペソ書は「巡回書簡」とも呼ばれ、地域教会で回されながら礼拝の場で読まれたものです。つまり、礼拝に子どもが出席していることが前提として書かれていることになります。当教会でもだいたいこの伝統が定着してきたように思いますが、子どもたちにも礼拝をささげる権利があるということを肝に命じて教会形成を続けていきたいと願われています。

【本論】

本論 1. 連れて来られた子どもたち

そのとき、イエスに手を置いて祈っていただくために、子どもたちが連れて来られた。

(19:13a)

主イエスの許には群衆や律法の専門家など、色んな人がやって来ますが、受動的に連れて来られる人もいます。4:24 では「それで人々は、さまざまな病気や痛み苦しむ病人、悪霊につかれた人、てんかんの人、中風の人などをみな、みもとに連れて来た」と言われていました。自分では救いを求めることもできないような、まさに「無力」な人々であります。そして、ここではそれと同列に置かれるかのように「子どもたち」が連れて来られます。

ここに連れて来られた子どもたちが何歳くらいであったのかは分かりませんが、原語「*παιδίον*」は「幼児」「児童」などを意味します。ユダヤには、「贖いの日¹」の前夜、子どもたちを長老（あるいは著名なラビ）の許へ連れて行き、祝福し、祈ってもらう伝統がありました。つまり、人々は主イエスのことを「著名なラビ」と認識していたのかも知れません。一般的には7歳以下の子どもが連れて来られたようです。子どもの将来のため、幸せのために、主なる神様の祝福を求める。これはその子の人生にとって重要な意味を持ちます。当教会でも七五三の時期に合わせ、それと置き換える形で「子ども祝福礼拝」を行なっていますが（文化脈化）、その祝福が全世界を造られた神から来るのであれば、ただの慣習と見ることはできないでしょう。

本論 2. 「妨げる者」となった弟子たち

ところが、弟子たちは彼らをしかった。(19:13b)

新改訳 2017 では「すると弟子たちは、連れて来た人たちを叱った」と意識されています。原文では「彼ら」(*αὐτοῖς*) という表現が使われていますが、弟子たちが誰を叱ったのかが分からないからでしょう。恐らく、親を叱ったのだと思われます。弟子たちの中で警護のような役割を果たしている人々がいたようです。主イエスの周りには誰かれ構わずやって来るので、それを制限するためにそのようにしていたのかも知れません。弟子たちから見て、主イエスの現在の状況はただならぬものが感じられた。十字架に架かるためにエルサレムへ行くという固い意志を示しておられる。想像するところ、これ

¹ 「贖いの日」とは、一年に一度、断食をして、自分の罪を神に告白し、赦しを求める日。

までも主イエスのところに子どもたちがワープと集まってくるようなことがあったのでしょう。しかし、弟子たちから見て今の先生は子どもと遊んでいるような状況ではない。ここは先生を煩わせないように追っ払ってやろう。そんな配慮から、子どもを連れてきた親を荒々しく叱ったのではないのでしょうか。

当時、ユダヤでは 13 歳にならないと一人前の男子として見てもらうことはできませんでした。また、兵役に就くことのできる 20 歳にならなくては、民を構成するメンバーの数に入れてもらうこともできなかった。女性や子どもはその数から除外されていたのです。弟子たちの目に、この子どもたちは「取るに足らない者」の代表であり、主イエスの許に来る資格はないと思われたのです。

本論 3. 天の御国の構成員

しかし、イエスは言われた。「子どもたちを許してやりなさい。邪魔をしないでわたしのところに来させなさい。天の御国はこのような者たちの国なのです。」(19:14)

マルコの並行記事では、ここで主イエスが憤ったと書かれています(マルコ 10:14)。実は、今日の箇所は 18 章に入ってすぐに起きた主イエスと弟子たちとのやり取り、「天の御国では誰が一番偉いか」という質問に対して、主が小さな子どもを呼び寄せ、「あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には入れない」と言われた文脈上にあるのです(18:1-5)。つまり、弟子たちは子どもを神の国の構成員として数え、重要視される主の思いをまるで理解していなかったことになります。言われたそばからやってしまうということが人間にはよくありますが、それは言われたことを聞いていないか、理解していないか、あるいは頭では分かっているにも身に染み付いた生き方が習慣として現れてしまうということのいずれかではないかと思います。弟子たちの心の中には、潜在的に「子どもは役に立たない存在」という意識があったのです。

もう一度、主イエスがなぜ子どもを重要視されるのかを確認しておきましょう。それは、子どもの素直さとか、感受性の豊かさといったことによるのではなく、むしろ彼らの社会的立場ゆえです。社会においてまだ力がなく、権力も財力も地位もなく、親に依存しなければ生きていけない弱い立場であることが、主イエスにとっては重要なのです。神の国の価値基準はこの世のそれとは正反対であり、世に見捨てられたような人々が選ばれ、その構成員となっていく。何の功績もなく、役にも立たず、むしろ遊女・取税人といった、当時「厄介者」と見なされていたような人々が、真っ先に神の国に入ってしまうのです。そして、「品行方正」なパリサイ人や律法学者が神の国に入れないというパラドックスが起きてくる。

18:3 と 19:14 を比較してみましょう。

- ・ **あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、入れません。** (18:3)
- ・ **天の御国はこのような者たちの国なのです。** (19:14)

どちらも同じことを言っているようではありますが、後者は更に重い意味を持っています。前者は「天の御国に入るためには、子どもたちのようにならないといけない」と言われていたのに対し、後者は「天の御国の構成員とはまさに子ども(のような者たち)なのだ」と断定されているからです。

大人たる者は、ここで難しい問題に直面します。現に立派に社会で働いており、自分という存在が様々な場所で必要とされ、貢献もしているとしたら、もはや神の国には入れないということになるのか。知らぬ間に子どもの心を失い、神の国から除外される存在となっているのではないか。私自身にもそのような不安があります。子どもはその意味で「自分は神の国に入っているか」などと問う必要もないのですが、大人は今一度、いえ何度でも自己吟味が必要でしょう。

本論 4. 霊的な大人＝神の前での子ども

逆説的ではありますが、信仰的に大人になると、神の前では子どもになるのです。信仰的に大人になると、私たちは人を愛するようになります。

愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。 (I コリント13:4-7)

このような生き方ができるようになるには、霊的に大人にならなくてはなりません。そして、霊的な「大人」は、自分は何者でもないことを知っています。自分の弱さを知り、自らを批判することができる。自分の能力も、立場も、持ち物も、一切を「与えられたもの」と認識し、自分で得たものとは決して思わない。神の招きに素直に応じることができる。救いを神からのギフトとして何のためらいもなく受け取ることができる。つまり、自分が罪深い人間であることを知っている。神の御前に役に立たない存在であることを認識している。そのような自分に神が声をかけてくださったというとても素晴らしい特権を喜んでいる。ゆえに、何らかの奉仕に召された時、嫌々ではなく、へりくだって、感謝をもって応じていくことができる。

反対に、霊的な「子ども」は、先の「愛の性質」と反対のことをします。すべてをひ

っくり返して読んでみましょう。寛容でなく、不親切で、人を妬み、自慢をし、高ぶり、非礼を行ない、自分の利益を求め、怒り、人のした悪を思い、不正に甘んじ、忍耐せず、信ぜず、期待せず、耐え忍ぶことができない。いかがでしょうか。自分の中に当てはまる性質はないだろうか。私にはあります。自分がまだ霊的に大人ではない部分があることを認めざるを得ないのです。しかし、皆様、逆説的ではありますが、そのような自分を知り、自らを責め、神に喜ばれる者になりたいと願い求めるとき、私たちは霊的な大人に一步近づくのです。そして、神の御前にへりくだり続けるとき、私たちはいつしか神の御前で本当の子どもとなっているでしょう。

そして、手を彼らの上に置いてから、そこを去って行かれた。(19:15)

主イエスは連れて来られた子どもの人生を祝福されました。ここには書かれていませんが、恐らく祈ってあげたのでしょう。十字架へと向かう道中に起きた心温まる一幕^{ひとまぐ}でした。

【結論】

教会に子どもたちが与えられていることは幸いです。子どもたちに向けられている主の眼差しを見逃さないようにしたい。また、私たちが子どもを見るとき、子どもから学ぶべきことがあるということを常に認識していきたいのです。子どもが持つ無力さ、親への依存性。これを決して蔑んではいけません。私たちもまた、神に造られ、神に依らずしては生きていけない存在であることを知れば知るほど、神を求めるようになるでしょう。ダビデがあらゆることを神に相談し、祈り、助けを求めたように、私たちも神の御前で全き子どもとして生きていきたいと思います。ダビデは神に依存しつつ、信仰においては大人でした。自分の命を狙う者をも愛し抜きました。私たちも、神への依存においては子どものように、人を愛することにおいては大人として歩みたいと思います。

【祈り】

子どもの神であられるイエス様。あなたが受難への道を進もうとしておられる時でさえ、連れて来られた子どもたちを愛し、膝に置いて祝福された姿を思います。今もあなたは子どものように神に依り頼む者を愛しておられます。どうぞ私たちに子どものような心をお与えくださり、神に全き信頼を置き、霊的には大人となって、人を愛し、人に仕える者とならせてください。この教会に集う子どもたちを祝福し、大人である私たちもへりくだって彼らから学ぶことができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

古今東西を問わず、ご自身に依り頼む者を、豊かに祝福し給う、父なる神の愛。

受難への道すがら、連れて来られた子どもを抱き寄せ、彼らを神の国の構成員と呼び給うた、主イエス・キリストの恵み。

神への依存においては子どものように、人を愛することにおいては成熟した者とならせ給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。